

平成29年度 自己評価(結果)

学校番号	126	学校法人静岡理工科大学 静岡北中学校	記載者	廣住雅人
------	-----	--------------------	-----	------

学校教育目標	将来のScienceとSocietyを牽引できる存在感と思慮深さを持った人材の育成	【総合評価】 多くの生徒が中高一貫教育の6年間で科学教育に対する認識を深め、将来科学教育に因んだ世界に進みたいと考えている現状を伺うことができ、生徒や保護者の期待に応えるための様々な取り組みが大方展開できたものと判断される。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望をもち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる	小規模な学校なので、教職員が情報を共有化し、目標に向かって一丸となって、学習指導・生徒指導、更には家庭との連携を密にした結果、いい成果が上がっているものと判断される。		
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 時代が求める教育を展開する		4	浜松日本語学院の学生たちとの交流授業を、各学年で実施した。また、タブレットを使い、米国の大学生とリアルタイムな交流を実施した。さらに、主体的・対話的教育手法を展開した。	留学制度の導入に関して検討をする。タブレット端末を活用し効果的な授業を研究し、高校と共にティーブ・アップラーニングに関する研修を継続し教育プログラムの展開について考える。
2 法人内学校との連携強化を図る		4	理数科・国際C科に進学する生徒数を増加させ、理数科においては、内進生のクラスを2クラス編成することができた。また、基礎学力が定着する教育に努めた。	高校進学に向けての基礎学力の定着に関してはもとより、大学入試改革で能力を發揮できるように、学力の三要素を身に着けた生徒を育成する。
3 評価される進路実績作りを行う		4	大学入試改革がどのように展開していくかに関して情報を集め、求められる教育を実践した。また、英語に関しては、4技能のうち、「聞く・話す」に重点を置いた授業を展開した。	大学入試改革を見据えながら、各教科での学習内容を結び付けて考えられる能力を持ち、バランス感覚のとれた生徒の育成に努める。
4 目標生徒数を獲得する		3	募集領域で、小学校6年の児童数が大幅に減少した状況の中で、55人の入学生となり、募集定員を充足することができなかった。	学校説明会と同時開催するイベントで、新たな参加型のプログラムを展開し、実施回数も増やす。また、個々の児童・保護者との接点を密にし、受検者数の増加を図る。
5 中学棟の将来構想について考える		3	全体でまとまって、将来の中学棟の構想に関して議論する機会を設けることはできなかったが、将来構想につながるiPadの導入をすることができた。	iPadの活用を授業に関わる多くの先生方に研究してもらい、静岡北中学校ならではのICT教育の形を検討しつつ、将来的な中学棟の建設に向けて、どのようなリソースが必要かを考える。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	評価	成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	さらに一層、21世紀型スキルの育成をしていくことで、2020年の大学入試改革に対応する人材育成を継続的に行う。	CASEや言語技術さらにはSS2といった教育の展開で、いわゆる21世紀型スキルを高め、他校に勝る教育を展開することができた点は評価される。また、スカイセフやサイエンスフェアの場で、実践的な英語力をつけている点も評価される。	4	2020年の大学入試改革を見据え、そこで必要とされる論理的思考力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を持った人材育成を継続的に行った。	従来から行っている21世紀型スキルを育成する教育を継続するとともに、様々な知識を応用し、自分なりの解を表現できる能力育成に発展させる。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	中高間の情報交換がしっかりと行えるようにし、6年間の教育の中で人を育てるための教育プログラムを検討する。また、高等学校の核となる理数科・国際C科に進学する生徒数を増加させる。	前年度と比較して、高校との情報の共有化は、双方のメンバーによるディスカッションの場が増加したことでできている。また、進路に関しても、静岡北高等学校の特色を、在校生に対して早期段階から伝え、よく意識啓発している。	4	中高間における情報交換は、様々な機会を通じて行えた。また、高等学校の核となる理数科・国際C科に進学する生徒数を増加させることができた。	中高間における情報交換の機会を増やし、6年間をどのような生徒育成をしていくかについて意見交換をしていく。また、高等学校において理数科・国際C科の中核となって活躍する生徒を多く進学させる。
生徒指導	健全な中学校生活をおくれるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	個々の生徒に応じた学習指導・生徒指導をする。そのために、定期的な会議にとどまらず、フレキシブルな情報交換の場を設け、教職員全体で個々の生徒理解に努める。	定例の会議に縛られることなく、適宜会議を開き、速やかに問題や課題解決に対応している。また、個々の生徒に応じた学習指導や生活指導を、家庭との連携の中で展開している点は評価される。	4	定例的な会議にとどまらず、フレキシブルな情報交換の場を設け、教職員全体で個々の生徒理解に努め、個々の生徒に応じた学習指導・生徒指導をした。	個々の生徒の日常的な変化を、教職員間で共有し、適切な対応について情報を交換し指導に当たる。また、保護者からの情報も集め、適切な指導の方法を考えていく。

進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実行する。また、本校独自のキャリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応	次年度に向けて、理数科や国際C科に進学する生徒を増加させ、静岡北高等学校で中心的な活躍をする生徒を一人でも多く育てる。	自己評価にあるように、早期段階からキャリア教育を充実させることは、各学年でできていると評価できる。また、高等学校進学の際に、生徒の適性を考慮した進路指導を行うことができたと判断できる。	4	次年度に向けて、理数科や国際C科に進学する生徒を増加させることができた。	基礎学力がしっかりと身についた生徒として、静岡北高校の理数科・国際C科の中核となり活躍できる生徒を進学させる。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険箇所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	学校法人全体で使用する安否情報確認システムを、うまく活用して、安否情報以外の通常の連絡体制を整えることで、生徒・保護者との連絡手段を新たに構築する。	数年前に中学独自の連絡体制を整えていたが、今年度は高等学校と方針を合わせて、新たな連絡方法などに関するシステム構築を再検討することはしたものの、確立させるまでには至らなかった。	4	学校法人全体で使用する安否情報確認システムを、うまく活用し、急な計画変更や行事における連絡など、安否情報以外の通常の連絡体制を整えることができ、生徒・保護者との連絡手段を新たに構築した。	法人全体で構築されたシステムを、安否確認だけでなく、日々の連絡にどの程度まで活用していくか検討していく。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療勧告を確実に実行する。また部活動の活性化を図る。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化	個々の生徒の健康管理に関する情報を共有化し、突発的なことが起こっても、教職員が適切に対応できる体制をつくる。また、部活動顧問との連携をうまくとりながら、生徒の活躍の場を確保する。	生徒の健康管理に関する情報共有化や有事の際の報告体制はできていると判断する。また、部活動に関しては、行事との関連を考慮しながら、生徒の活動時間を確保したと考える。	3	個々の生徒の健康管理に関する情報を共有化し、突発的なことが起こっても、教職員が適切に対応できる体制を作れた。また、部活動顧問との連携をうまくとりながら、生徒の活躍の場を確保することもできた。	個々の生徒の健康管理・精神面での教職員間での情報共有は継続して行い、突発的な出来事に対応する体制づくりを継続して行う。また、部活動顧問との連携を取り、生徒が活動しやすい体制を作る。
特別支援教育	「知・徳・体」のバランスのとれた人間として成長させる教育プログラムを展開する。	CASE、言語技術教育、SS2といった本校独自の教育プログラムの推進と、心身の成長に即したキャリアデザイン教育プログラムの展開による支援	新たに、校内ネットワークを利用したICT教育の実践を、各教科指導の中で実践するとともに、情報共有化し、生徒にとって効果的かつ魅力的な教育体制を提案する。	校内ネットワーク環境の整備に伴い、十分とは言えないものの、新たなICT教育の研究をはじめた。また、悩みを抱える生徒・保護者に対する教職員・スクールカウンセラーのサポート体制はできていた。	4	新たに、校内ネットワークを利用したICT教育の実践を、各教科指導の中で実践し、情報を共有化することで、生徒にとって効果的かつ魅力的な教育体制を提案していくことができた。	iPadの導入により、各教科内で、或いは日々の学校経営の中で、どのような活用方法が効果的であるかを実践・検証し、次年度につなげる。
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が勤務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から考え、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用	平成29年度からの第三期中期計画を計画を実行し、新たな学校づくりを進めると共に、高い意識を持った教職員集団を形成し、社会的な評価がより一層高まるよう努力する。	高校との連携の中で、中期的な学校変革のビジョンについての検討がなされ、平成29年度からの第三期中期計画が策定された。	3	平成29年度からの第三期中期計画を計画を実行し、新たな学校づくりを進めると共に、高い意識を持った教職員集団を形成し、社会的な評価がより一層高まるよう努力したが、予定通りに進めることができなかった項目があった。	平成29年度の実績の中で、第三期中期計画の軌道修正をかけたが、教職員一丸となって、目標達成に向けて業務遂行をする体制を作る。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしている。	計画的な研修体制の確立、校外研修への参加、研修報告会の実施	第三次中期計画の実行段階に入らないうち、改めて育てたい人間像や、カリキュラムマネジメントを検討する中で、学校の方向性を明確にし、教職員全体が一丸となって学校づくりに取り組んでいく。	ICT教育の展開は、中学校設置時の一つの目玉であったことを考え、ある意味原点回帰をすずる中で各教科での展開ができたことと評価される。今年度から整備されたWi-Fiの校内ネットワーク環境を利用したものは、まだ成長段階であるが今後に期待したい。	3	静岡北中学校として、育てたい人間像や、カリキュラムマネジメントを検討する中で、高校と共にティーブ・アクティブラーニングに関する研修を行い、今後の学校が進むべき方向性を考え、教職員全体が新たな学校づくりに着手した。	次年度も継続して、高校と共にティーブ・アクティブラーニングの研修に取り組み、中学校における取組がどのような形でできるかを実践・研究していく。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	教員だけでなく、これからは生徒・保護者にとっても効果的なプログラムを実行することで、学校全体として意識を共有できるようにしていく。	外部講師を招いてのキャリア教育や心身の教育は、保護者の間でも日常の子育てのヒントになるものであったと好評であった。	4	ネット依存度スクリーニングテストを実施し、客観的な数値で、個々の生徒のネット依存度を提示し、それをもとに、ICT情報教育プログラムを、生徒・保護者に実施し、ネット社会におけるモラルやテラシーに関する情報を共有した。	学習面・生活面において、学校だけの指導では、中々解決できないことが多いので、保護者との連携のもとに、生徒たちの成長を支援する。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実に実行し安全管理に努め、生徒たちにしっかりと学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	タブレット活用において、より早く具体的な実践を展開した授業展開をしていく。	高校と一緒に、Wi-Fi対応の校内ネットワーク環境が整備されたが、タブレット端末の台数が少なく、教職員が活用する方法を十分に検討することができなかったことは、やや課題が残った。	3	タブレット活用において、各教科で新たな活用を模索し挑戦した。	各教科で、どの時期・どの学習内容で、タブレットを使うことが効果的であるかについて実践・研究する。
				総合評価	4		